



広島工大同窓会会報

第 37 号

発行 広島工業大学同窓会
編集 同窓会編集委員会

731-5193 広島市佐伯区三宅2丁目1-1

広島工業大学内

TEL 082-921-3121 (内線) 8103

E-mail: dosokai@jim.it-hiroshima.ac.jp

U R L : http://www.jim.it-hiroshima.ac.jp/dosokai/



最近思うこと

広島工業大学同窓会副会長
荒谷 壽一

突然に同窓会会報編集委員会から封書が届き、中身を開いてみると執筆のお願いであった。内容についてはお任せと書いてあるものの、任せられると何を書いているのかなかかなか出てこない。むしろ題が決めてある方が書きやすいかな、なんて嫌みなことを頭の中で考えてみるが、文才がないものは原稿用紙を机に出したまま、日数が過ぎてしまう。もうこれ以上はと自分でいやいや筆を執ったものの、頭に浮かぶことは愚痴ばかり。そこで土木卒業生として素直に今思っている建設業界について書いてみた。

どの業界にも言えるが、建設業をとりまく環境は日に日に厳しさを増してきており、特に公共事業そのものに対する国民の意識も大きく変化している。無駄な税金を使っている工事などには当然の事ながら批判の目が注がれ、本当に必要な工事も含め全てが悪者としてマスコミに取り扱われるという、今まで経験したことのない状況に置かれている。確かに無駄な工事が多々あったと考えるが、今後の少子高齢化時代に向けて、社会資本整備は今からしっかりと取り組んでいかねばならない。特に生活に密着した社会資本整備はまだまだ先進国の中でも大きく遅れをとっており、下水道の整備、電柱の地中化、都心部の交通の混雑、環境に配慮した町づくりなど、やらねばならないことは枚挙にいとまがないほどだ。しかしバブル崩壊後（この言葉ももう聞き飽きた言葉である）すでに10年を越え、デフレスパイラルのまったただ中で全てが悪循環。ますます不景気が侵攻し、企業も給与カットのみならず、リストラと称して人員の整理を断行せざるを得ない状態までになってきている。若い学生もなかなか自分の行きたい企業に就職が出来ず、フリーターと称する人が400万人もいるようだ。こんな世の中どこか変だと思いつつも、この日本は何事もないように今でも幸福そうに見える。これでいいとは誰も思っていない。しかし何をすれば良い方向へ変化していくのか全くの手探りといった感がある。とにかく焦燥感でいっぱいである。あまりにも長すぎるトンネル、これ以上続くと気概とやる気が薄れてしまいそうになってくる。一生懸命ない知恵をしばり、新しい世界を求めて汗をかき動いてみるが、そう簡単に答が出るものはこの世界にはない。「若い能力と知恵を集めて」とは思うものの、こんな見えない、先の読めない時代に学生を採用したくても出来ないもどかしさ。

国の経営も今が一番の正念場だと思っはいるものの、国が立ち直る前に中小企業が市場から寄り切られてしまいそうな感がますます強くなってきた。市場原理、弱肉強食、競争原理、理屈は

よく理解できるがなかなか身体になじまない。原理、原則、良いとか悪いとかは別として、農耕民族が狩猟民族の生き方をとにもかくにも取り入れなければ、生き残れない時代になってきた。長年培われた日本民族の文化がその手のひらを返したように変えられず、頭で分かっているながら身体がなかなか覚えてくれないというのが現状である。何でもかんでもアメリカとヨーロッパが優れているとは思えない。しかし何故日本の強いところと良いところを残せないのかと、いくら嘆いてみても解決策は出てこない。物事をアメリカ人的に考え、行動も取り入れるべくアメリカに行くか？今さらそんな勇気も時間も残されてはいない。今流行りの成果主義なるものを取り入れ、とにかく利益さえ出れば良い。利益を出す為には手段を選ばず、常に株主に顔を向け顔を伺うこととなる。結果として短期間で利益のみを確保するという道を選択し、株主の批判をかわすために粉飾決算に手を染めることとなる。現実にはアメリカではこのような事件が大企業で起こっている。やはり企業の経営は少し長いスパンで考え行動するものであり、しっかりと地に足の着いた経営こそ、企業継続の基本であると思う。従って日本はなんといっても社員あつての企業であり、日本独特の終身雇用はしっかりと堅持し、その中から「うちの会社」という愛社精神が生まれる。この終身雇用の中に評価をはっきりさせていくことが必要である。この良き日本文化と家族的な風土を否定する事は国の大きな損失となると思う。若い人に夢と希望がもてるような社会、自分の能力を発揮できる場をもっともっと広げることこそ、今大事である。いつまで痛みを耐えられるか長い長いトンネルから抜け出すべく、自分にむち打って知恵をしばりだしている最中である。

同窓会の皆さんもそれぞれにご苦労されていることと思います。お互いに良い考えがあれば、いろいろお聞かせ願いたいものです。さて学園も平成18年度には50周年を迎えられます。急激な社会変化の中で、学園をとりまく環境も大変厳しいものがあると思いますが、今後は小学校を含め大学に至るまでの学園として、今までの良き伝統を受け継ぎ、新しい歴史を作られていくものと思います。同窓会はすでに3万人を越える数となってまいりました。この力を総合力として活用することこそ、誰もが望むところであります。広工大卒業生も還暦を迎えるOBも出てまいります。考えれば素晴らしいことであり、力強さを感じます。我々OBとして学園、そして同窓会が新しい時代に向け、大きく羽ばたくことを期待してやみません。お互いがんばりましょう。